

# 不妊治療および性交頻度と出生力

Fertility treatment, coital frequency, and fertility

小西祥子<sup>1</sup>、玉置えみ<sup>2</sup>

1 東京大学、2 学習院大学

Shoko Konishi, Emi Tamaki

1 The University of Tokyo, 2 Gakushuin University

## 緒言

性交頻度は出生力の媒介変数の一つであることから、夫婦のセックスレスは低出生力に影響している可能性がある。また日本では中国に次いで世界で2番目に多くの不妊治療が行われており、不妊治療も出生力に影響を及ぼすと考えられる。そこで本研究では不妊治療経験および性交頻度と、女性の既往出生児数との関連を分析することを目的とした。

## 方法

2014年に20-44歳の女性3214名を対象として実施したBiodemography projectのデータを解析に用いた。過去6ヶ月間における配偶者との性交頻度および、結婚期間、学歴、配偶者の就業状況、世帯収入、不妊治療経験の有無、既往出生児数についてオンライン質問票によって回答を得た。既往出生児数を従属変数とした分析をするため、既婚で35歳以上の1214名を解析の対象とした。統計解析のため性交頻度を低(月に1日未満)と高(月に1日以上)の2群に分けた。従属変数を既往出生児数、説明変数を結婚期間、性交頻度(低または高)、不妊治療経験の有無、社会経済変数1つ(学歴、夫の就業状況、または世帯年収)とする重回帰分析を実施した。性交頻度と既往出生児数との関連は不妊治療の有無によって異なる傾向が予備解析においてみられたため、両変数の交互作用項を説明変数に加えた。

## 結果と考察

解析対象者の平均(標準偏差)年齢は39.6(2.8)歳、結婚期間は10.5(5.2)年、結婚年齢は29.0(4.6)歳であった。性交頻度は低い群が8.2%、高い群が32.1%、欠損値が19.7%を占めた。不妊治療は経験ありが22.1%、なしが71.8%、欠損値が6.1%であった。結婚期間が10年以上である女性の既往出生児数の平均(標準誤差)は性交頻度の低い群と高い群でそれぞれ1.46(0.06)および1.86(0.08)であった。社会経済変数として世帯年収を投入した重回帰モデルでは、不妊治療経験が無く性交頻度の低い(無・低)群を基準とした時の回帰係数は、無・高では既往出生児数が0.41(0.25, 0.56)、有・低で0.05(-0.15, 0.25)、有・高で-0.64(-0.96, -0.33)であった。治療経験のない既婚女性においては、性交頻度が高いと子ども数が多い傾向があった。一方、治療経験ありの既婚女性においては、性交頻度が高いと既往出生時数が低い傾向があった。世帯年収の代わりに学歴あるいは夫の就業状況を投入したモデルでも同様の結果が得られた。本研究は因果関係を明らかにできないという限界があるものの、性行動と出生力の間に関連がある可能性を示唆した。